



Dear





飛びかけの綿毛。



飲みかけのコーヒー。



読みかけの本。

部屋の整理をしていたら、  
ベタだけど「未来の自分へ」って書いた手紙が見つかった。  
差出人は12歳のあたし。  
あの頃の自分にとっては20歳っていうのはとんでもなく大人だった。

時を経て夢見てた成人女性になったわけだけど、  
まあ過去の自分に何か伝えられるほど悟ってもいなくて、  
生きてるって常に途中にいることなんだなあって思った。





電車で揺れながらぼつぼつ光る地味な夜景をみていたら、  
なんとなくまだ家に帰りたくなくてちょっとだけ散歩をすることにした。



冷たい夜空の、  
満月にはほんの少しだけ足りないびつな形をした月を見て未来をおもう。

世界は自分の思い通りになんてならないし、どうやら行く先も暗いらしい。



だけど漠然とした可能性だけが目の前に放り出されていた  
上京したての頃を思い出して、裏切りたくないと思った。

無知で傲慢で可愛げのなかった自分を、裏切りたくないと思った。

ちょっと本気で、そう思った。

恋をするならロールケーキみたいな男性がいい。



優しく包み込んでくれて、しっとりとあまーい感じ。

あたしがコーヒーみたいなビターな女だから  
相性は抜群だと思うのよ、

なんて妄想しながらロールケーキを食べるバレンタインの日。